論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	厭世詩人としての北村透谷
氏名	陳璐（チンロ）

本研究は北村透谷という日本明治期における重要な詩人・文学家を対象とし、文芸論を含めた彼の思想の全体像を研究するものである。

北村透谷は明治末から戦後に至るまで、長らく「ロマン主義」（「浪漫主義」）者と称され、これはすでに日本近代文学史の常識になっている。しかし、日本文学史で言われる「ロマン主義」という日本語はもともと曖昧で、厳密な定義を持った属性の概念ではない。そもそもこの用語のもととなっている Romantisicm〔英〕、Romantik〔独〕と Romantisme〔仏〕概念自体が大きな曖昧性を含むので、このような属性概念で明治初年生まれの透谷の本質が捉えられるとは思えない。

それゆえ、本稿は、従来「ロマン主義」概念から捉えてきた透谷論に疑問視する。従来自明なものとして使用しがちであった「ロマン主義」という枠組を相対化させ、また後の時代の価値観を透谷に代入する従来の方法を離れ、透谷自身の言葉で透谷を語る立場を取る。

本研究の第一の課題は、青年期から最後まで一貫してきた彼の「厭世」思想を捉えなおすことによって、「ロマン主義」という曖昧な枠組みに捉えきれない透谷思想の政治性と本質を洗い出すことである。

第二の課題は、明治元年生まれの透谷が、明治以前の思想との関連性に光を当てて、透谷が陽明学、江戸文化、東洋古典、東洋文化の領域に対していかなる価値観を抱いていたかを検討することである。この議論は、日本近代が伝統といかに対峙し、如何に評価したかという問題につながる。

本研究は二部構成である。

第一部では、北村透谷の厭世思想に関する総論である。「ロマン主義」者とされる北村透谷の「厭世」とは何か、いかに形成され、同時代の他の思想といかなる拮抗関係をもっているかを考察する。更に「厭世」思想が内部生命、創造的勢力、想世界など透谷の代表的な思想といかなる関係を持っているかを検討することによって、透谷

の初期から最後までの諸理論を統一的に把握しようとする。

具体的に、第一章において、明治二十年代の『文学界』、三十年代の『明星』派、また四十年代の『スバル』を中心とする運動を、一律に「ロマン主義」と捉えることに疑問視し、透谷が参与した『文学界』と、与謝野鉄幹・与謝野晶子が主導した『明星』を比較することで、主張の差異と思考様式の差異を捉える。その手かがりとして、透谷が日清戦争の二ヶ月に自殺した事実と、透谷の非戦・平和論、官能性の美、感覚の解放といった非政治的個人主義を擁護『明星』派の相違を明らかにする。

第二章では、透谷の「厭世」思想を改めて掘り起こし、脆弱・死に直結する行為としての「厭世」思想ではない、反抗的・否定的な精神としての透谷の「厭世」思想とは何かを詳細に検討する。また、「厭世」が透谷のあらゆる代表的な理論「他界」、「内部生命」、「創造的勢力」との関係を検討し、「厭世家」の図式をまとめる。

第三章では、これまでほとんど検討されてこなかった、透谷の歴史観を検討する。若い頃自由民権運動に参加し、その後政治の世界から文学の世界に移った北村透谷は、一般に文学家・詩人として見なされる。また、キリスト教入信も加え、従来の先行研究は、政治、文学、宗教という三つのジャンルにおいて、北村透谷の様々な側面を捉えてきた。本章は、今まで埋もれていた北村透谷の歴史観の問題に着目し、厭世詩人である北村透谷の歴史観はどのような特性を持っているか、それを踏まえてどのような文学的実践を行ったかについて論じることを目的とする。この問題を探る際に、同時代に思想的に透谷と関わった福沢諭吉、山路愛山、徳富蘇峰らの歴史観を概観し、彼らと対照しながら、透谷の歴史観はどのような特性を持っているか、またそれを巡ってどのような文学的実践を行ったかについて論じる。

第四章では、透谷が政治から文学へ転向したことに着目し、転向前後に一貫した自由民権思想を検討し、安易なナショナリズムに走りはしなかった透谷の「厭世家」という革命家の態度を考察する。透谷の「厭世家」という革命家の態度は、自由民権運動脱退後の彷徨を経験し、明治一〇年代に運動の主体であった「壮士」への批判、さらに曾て「壮士」であった自己への批判まで降りていきながら、「幾多の苦獄」というモチーフを内面化していく過程があった。これを機に、政治活動で叶えなかった精神の自由を自らの文学試行の根拠とし、それと相呼応する文学的表象としての他界、想世界といった、現世的価値観では測れないイデア的世界を立脚点としたのであった。こうした文学理論の実践こそ、透谷が一見浪漫的に見えながら、一方では一貫した革命的政治姿勢を帯びている所以である。その点において彼は優れた批評性の持主であることを再評価する。

第二部では、小説が明治文学の覇権を得た時代に、「厭世家」である透谷は如何なる理由で自らを詩人と規定し、最後までそれを貫徹したのかを解明する。「厭世」思想を「詩人」と結び付けると、始めて統一した透谷の全体像が見えてくることを主張したい。

この部分では、明治という近代と伝統・近世との連続性・非連続性に着目し、透谷

が陽明学、江戸文化、中国古典、伝統的な楽器の表象など東洋的思想文化の領域に対していかなる価値観を抱いていたかを検討する。各トピックの検討を通して、文学・思想・宗教などの面から自らを「詩人」へと導かんとする志向を具体的に洗い出す。この議論は、日本近代が伝統といかに対峙し、如何に評価したかという問題につながる。各章の内容は以下の通りである。

第五章「北村透谷と宗教――せめぎ合う陽明学とキリスト教」においては、キリスト教に一元化しがちな従来の研究を相対化し、陽明学によるキリスト教批判という視点から、透谷の宗教問題を再考する。まず明治初期にキリスト教に入信しても明治三十年以降そこから離脱した人が多く、彼らの大多数は幕末の武家の出身だという現象に着目し、この問題に潜んでいる日本独自の精神的な問題を透谷に絞って検討する。次に、明治初期の思想家たちの多くがキリスト教と関わる一方、幕末の陽明学の影響も強く受けていたことに着目し、透谷をはじめとする明治の思想家における陽明学によるキリスト教批判という側面を議論する。透谷の中でせめぎ合う陽明学とキリスト教の問題を追跡することによって、透谷が「知」なく「行」しかないと評価するキリスト教を懐疑する理由を明らかにする。また陽明学の知行一致説を活用する形で、透谷が最終的に知行一致の詩人、言い換えれば観察としての「知」と創作としての「行」という詩人の業を理論化したことを提示する。

第六章「北村透谷と江戸文化」においては、今まで看過されることの多かった透谷の江戸文化への造詣を吟味し、江戸文化に対する両義的な評価を検討する。江戸文化の中心思想である「粋」と「侠」を巡って、透谷が批判から再評価へと転じたプロセスを手がかりとして分析を加える。透谷は、近松門左衛門の心中物、井原西鶴の粋の文学に代表される元禄文学を批判する一方、幽玄の詩学を表現した松尾芭蕉、小説を通じ義や侠の精神を描き切った曲亭馬琴らに対して共感を持つ。「粋」と「侠」を「平民の初声」と再評価した透谷が、江戸文化に対する評価の両義性を通じて、詩人に導かれる「至粋」という理想を獲得したことを明らかにする。

第七章「北村透谷と東洋的なもの――東洋的構図の変奏」においては、近代日本の劇詩の嚆矢をなした透谷の代表作『蓬莱曲』を取り上げ、『蓬莱曲』を支えている〈蓬莱山〉という舞台にテーマを絞り、その由来から発見された東洋的ユートピアの性格を透谷がどのように作品に活用し、多様な像を呈示したか、という文学創作の手法を分析する。また、従来富士登山という作者の体験に基づくとされてきた〈蓬莱山〉という舞台設定が、実は別の意を籠めたものであることを探る。また、別篇「慈航湖」の未完・放棄を巡って議論されてきた現在までの批評に対して、本章は舞台〈蓬莱山〉の考察を入口にして、一貫した視点と理論のもとに、別篇の深層的構造と結局挫折したこの作品の問題点を提示することも課題とする。この課題を通じて、詩人を導く「創造的勢力」という概念を透谷が獲得した思想的経緯を探る。

第八章「感覚の近代化――伝統的楽器が表象する思考原理」においては、三味線の音をめぐる耳の近代化という視点から近代化による聴感の変化を透谷に絞って議論する。透谷は武士と平民の趣味について、「琴の音を知り、琵琶の調を知るものは、

之を三絃の調に比較せよ、一方はいかに荘重に、いかに高韻なるに引きかへて、他はいかに軽韻卑調なるに注意するなるべし、斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。」(『徳川氏時代の平民的思想』) と述べている。

江戸の音文化の中心的な役割を担っている三味線が「軽韻卑調なる」音と聞こえるのは明治以後のことである。明治の近代化は、都市空間・服装・技術などの問題であると同時に、音に対する感覚の変化の問題でもある。この章では、透谷の三味線、琴、琵琶を語る言説に着目し、それらの楽器が如何なる表象的イメージをもっているかを検討する。またこのような検討によって、透谷が詩人を導く「無絃の大琴」という境地を獲得したことを示す。

以上のように、「厭世」思想と「詩人」との結合が、初めて統一的かつ一貫した透谷の全体像を浮き彫りにし得ることを検証し、従来と異なる透谷像を提供する。